



©2014 中川英明

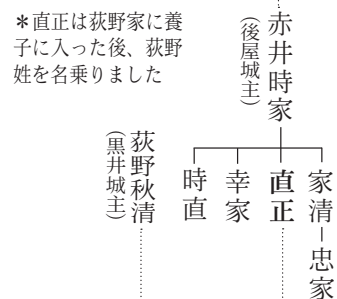
「丹波の赤鬼」と恐れられた男

丹波国水上郡を中心に勢力を誇った水上町新郷の後屋城主赤井氏の出身。幼いころから豪胆で知勇に優れていたといわれる。その後、朝日城（春日町朝日）の萩野氏の元へ養子として送り込まれ、以降、萩野姓を名乗った。

天文23年（1554）には、黒井城主であった萩野秋清を刺殺し、自ら黒井城主に。近隣諸豪から「丹波の赤鬼」と呼ばれ恐れられた。このころから、悪右衛門と称して、水上郡、天田郡（福知山市）、何鹿郡（綾部市）を治め勢力を伸ばした。



赤井氏略系図



悪右衛門直正愛用の鉄兜



直正愛用の野戦兜。生家の祖父赤井伊賀守忠家から伝わった。

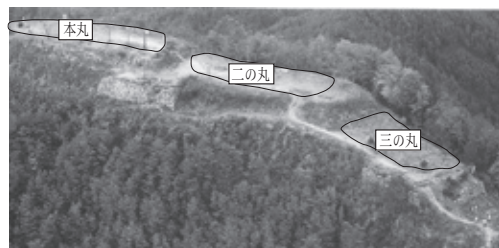


兵主神社（春日町黒井）

直正の死後、愛用の兜は兵主神社（春日町黒井）に奉納されている。
 *非公開



戦国時代に直正が居城した黒井城は、南北朝時代の建武2年（1335）に、赤松筑前守貞範が山頂に砦を築いたことからその歴史がはじまったといわれています。その約200年後の天文23年（1554）に、直正が城主となり、その勢力の拡大とともに黒井城の大改修に着手しました。本城周辺には、駐屯施設である曲輪を堅固な石垣で守り、主要な尾根には砦を築きました。また、山中のいたる所に堀り切り、切り岸と呼ばれる防御施設を設置する



黒井城跡 本城部全景（写真左） 自然石をそのまま使った野づら積みの石垣。戦国の城らしい荒々しさを見せています（写真右）



など、直正の手によって、標高356mの猪ノ口山系全体が巨大な要塞へと変貌を遂げました。
 元龜元年（1570）3月、直正は甥・忠家とともに京都にいた織田信長のもとに向かい、味方に付くことを約束。水上天田（福知山市）・何鹿（綾部市）の3郡を与えられるなど、山城の完成とともにさらに勢力を伸ばしました。しかし、時は戦国時代。情勢の移り変わりは早く、直正のもとにも乱世の波が押し寄せることとなります。明智光秀の「丹波攻め」により、黒井城が壮絶な戦いの場となる日が刻一刻と近づいていました。



黒井城全図

猪ノ口山系すべてが国の史跡

黒井城本丸を取り囲むように砦や曲輪などの防御施設が張り巡らされている。平成元年には、人の手を加えることなく戦国時代のようなすをそのまま残す城跡として高い評価を受け、国の史跡に指定された。

- 乱世を駆けた丹波の猛将 -

戦国の足跡を求めて

戦国の山城 黒井城に
 「丹波の赤鬼」と呼ばれ
 恐れられた男がいた



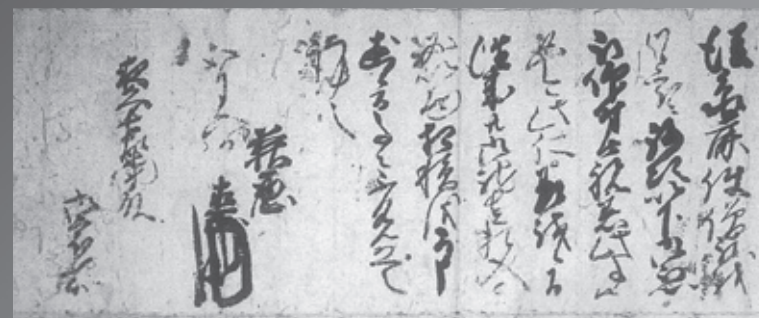
萩野（赤井）直正
 出典：絵本太閤記

黒井城主

萩野（赤井）

悪右衛門直正

黒井のまちなみを覆うようにそびえる猪ノ口山系。かつて、その山頂には、戦国屈指と呼ばれた山城「黒井城」がありました。戦国動乱のさなか、黒井城主としてこの地を治めたのが萩野（赤井）直正です。
 当時、丹波国最大の勢力を誇り、「丹波の赤鬼」として恐れられた直正。甲斐武田氏の軍用書「甲陽軍艦」には、「名高き大將衆」13人の筆頭に記されるなど、勇猛果敢ぶりが今に伝わります。
 しかし、織田信長の命を受けた明智光秀の「丹波攻め」を境に直正と黒井城に転機が訪れます。そこには、黒井城主として戦国時代の荒波を生きた萩野直正の知られざる歴史がありました。



今に伝わる直正の書状。黒井城主になったころ、自らを悪右衛門（悪は勇猛さを表す）と名乗った。書状に萩悪の署名と花押が記されているのがわかる。



鬼の架け橋
明智光秀は鬼の架け橋がある金山（柏原町上小倉）に金山城を構え、丹波攻めの拠点とした。

直正にまつわる「貂の皮」伝説



『貂の皮』
写真提供：龍野神社奉賛会

羽柴秀吉の命令を受けた脇坂甚内が、子どもたちや家来の安全を条件に、黒井城の明け渡しを求めて単独で乗り込んだ。

直正は、若き甚内の勇気を称え、伝来の「貂の皮」でつくった槍の鞘を贈り、その後、甚内は、この皮のおかげで出世したと伝えられている。



司馬氏の小説にも登場した「貂の皮」

司馬遼太郎の小説「馬上少年過ぐ」で、「貂の皮」のエピソードが綴られているほか、直正の人間像についても描写されている。（新潮文庫）



雲海に浮かぶ「黒井城跡」（撮影：前田太陽）

は2カ月以上におよびましたが、突如として波多野秀治が寝返って光秀の陣を急襲。明智軍は、壊滅的な打撃を受け退却し、亀山城（亀岡市）へと逃げのびることとなりました。後世、明智軍を破ったこの作戦は「赤井の呼び込み戦法」と呼ばれ、その武勇伝は今に伝えられています。

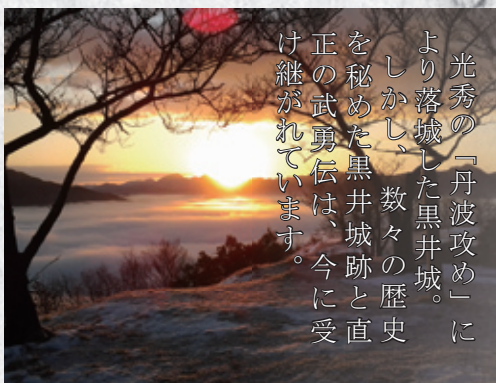
光秀の進軍と直正の死

天正5年（1577）、信長の命を受けて、光秀が再び丹波攻略にとりかかり、八上城や黒井城に軍を進め

ました。この緊迫した状況のさなか、直正が病死。直正の嫡男・直義はまだ幼く、直正の弟・赤井幸家が総指揮をとり、光秀との対決に備える事態となりました。

黒井城 無念の落城

丹波国に入った光秀は、前回の敗戦の二の舞を演じないための策として、鐘ヶ坂峠に金山城を築き、八上城と黒井城を分断。ここを拠点に八上城を攻め、波多野秀治を攻略した後、氷上郡内の城や砦を次々と押さえ、黒井城を孤立無援の状態に追い込みました。盟主



光秀の「丹波攻め」により落城した黒井城。しかし、数々の歴史を秘めた黒井城跡と直正の武勇伝は、今に受け継がれています。

直正を欠いたなか、兵士たちの士気は上がることなく、天正7年（1579）、黒井城はついに無念の落城を遂げました。

「丹波攻め」の背景
元龜2年（1571）11月、突如として但馬の山名氏が丹波国氷上郡に侵攻し、足立氏の山垣城（青垣町遠阪）を攻めました。直正はすぐに兵を向かわせ山名勢を一蹴。勢いに乗った直正は、一気に但馬を攻め立て、現在「天空の城」として知られる竹田城（朝来市）を占拠し、さらには、山名氏の本城・比隅山城へも迫りました。



写真提供：吉田利栄

天空の城「竹田城跡」。直正は、一時この地を占拠しました。

「呼びこみ戦法」で明智軍を撃退

天正3年（1575）、ようやく信長は明智光秀を総大将に命じ、丹波平定に向けて攻略を開始。それを受けて竹田城に立てこもっていた直正は、急いで黒井城に戻り戦闘態勢を整えました。これに対して、光秀はまず、隣国多紀郡（篠山市）の八上城主波多野秀治を服従させ、着々と黒井城包囲網を形成していきま

した。光秀の「丹波攻め」

地域の歴史を次の世代へ 春日戦国太鼓

直正の勝利を祝って領民たちが歌い踊ったのが「黒井踊り」の原型。そのリズムを和太鼓で表現し、後世に伝えようと「春日戦国太鼓」が昭和62年に発足。毎年11月に開催される「黒井城まつり」で勇壮な太鼓を響かせている。



5月に行われた「春日れんげまつり」にも出演し、迫力ある演技を披露。



猛将 荻野直正

©2014 中川英明

黒井城包囲。その時、直正がとった秘策とは。明智光秀「丹波攻め」から黒井城落城までの記録。

智将 明智光秀 襲来
黒井城 決戦



智将 明智光秀

©2014 中川英明



春日局生誕の地
興禪寺

◆春日局（お福）

父利三は、本能寺の変で光秀とともに織田信長を討った後、羽柴秀吉に敗れ処刑された。お福は、親戚に育てられた後、三代將軍徳川家光の乳母として迎え入れられ、大奥を取り仕切った。



©2014 中川英明

数百年の時を経て 黒井城跡



（撮影：前田太陽）

↑雲海に浮かぶ黒井城跡。秋から冬にかけて発生する雲海が、黒井城跡をより幻想的な世界へと誘います。

直正が紡いだ歴史

ゆかりの地に思いを馳せる

←黒井城落城の後、戦後統治にあたったのが光秀の重臣 斎藤利三です。黒井城下に活気が戻ってきたころ、利三は亀山城から妻と子どもを下館（興禪寺）に呼び寄せました。ほどなくしてこの地で産声を上げたのがお福、後の春日局です。

波多野秀治の居城 八上城跡 （篠山市）



↑「丹波攻め」の舞台となった古戦場跡。光秀による幾多の攻撃により、戦いは鮮烈を極め、天正7年（1579）、遂に落城しました。今でも城跡には多くの歴史的遺構が残されています。

◆波多野秀治

光秀とともに黒井城を攻めたが、突如として反旗を翻し、直正とともに光秀を打ち破った。八上城落城後、捕らえられた波多野秀治は兄弟とともに、安土に送られ処刑された。



©2014 中川英明

歴史 浪漫



丹波が誇る猛将の足跡を訪ねて
「丹波戦国名将伝」

萩野直正が明智光秀を撃退した「呼び込み戦法」や直正・光秀二人のプロフィール、さらには、彼らゆかりの人物や旧跡などを紹介したパンフレットが完成しました。歴史ファンならずとも見ごたえ、読みごたえ十分な内容です。

VOICE - イラスト担当者 中川さんに聞く -

観光パンフレット「丹波戦国名将伝」やこの特集ページに掲載されている直正や光秀、春日局などのイラストは、すべて中川英明さん（29）（氷上地域）が約2カ月をかけて描き上げた作品です。

中川さんは、「戦国時代、丹波市にも強く生きた人たちがいたことを知ってもらいたかった。このパンフレットが丹波市に興味を抱くきっかけになれば」と期待を込めて話しました。

©2014 中川英明



※このパンフレットは、主に市外で行われる観光PRイベントなどで配布されています



©2014 中川英明



- 次世代に残したい私たちの宝物 - 「受け継がれる歴史のバトン」

（撮影：前田太陽）

村上 完二さん（90） 春日町黒井

猪ノ口山系の麓、黒井城跡を真正面に見る場所に暮らすのは村上完二さん（90）です。長年、黒井城跡の歴史や遺構について調べ、黒井城跡の史跡指定にも尽力した人物です。

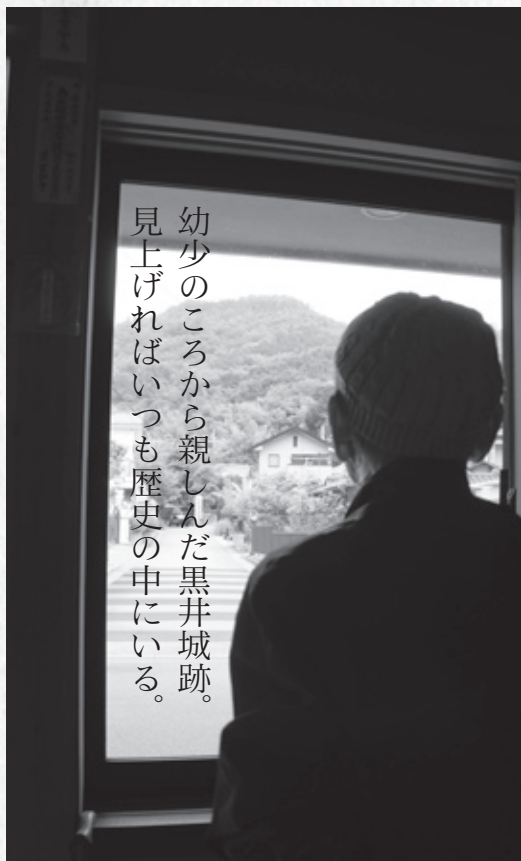
昭和48年に、仲間3人との共著で「丹波戦国史」を出版。これは、それまで部分的であった黒井城跡や直正をはじめその時代に生きた人物に関する史実をはじめ一冊にまとめた歴史書です。出版にあたって村上さんは、黒井城跡に眠る遺構調査を担当しました。

戦国の山城として堅固を誇った黒井城。その理由について村上さんは、「猪ノ口山系の尾根続きには高い山がなく、上から攻められる心配がありませんでした。また、尾根が幾多にも分かれているので、敵の攻撃を分散させることもできました。さら

に、付近には飲料水として欠かせない用水が豊富にあったことも有利に働いたといえます」と、猪ノ口山系の恵まれた地形や地理的条件を挙げます。

長年に渡り、ゲストティーチャーとして、地域の小学校で黒井城跡の歴史を伝えてきた村上さん。「自分たちのまちの歴史を知ること、地域への愛着が育まれるのでは」と郷土学習の意義を話します。

今年で御年90歳を迎えた村上さんの願いは、未だ山中に眠る未発見の遺構を調査すること。そして、今、村上さんの息子さんがその意思を受け継ごうとしています。そう遠くない未来に、新たな遺構が発見される日がやってくるかもしれません。



幼少のころから親しんだ黒井城跡。見上げればいつも歴史の中にいる。